

肥育月齢3カ月短縮達成

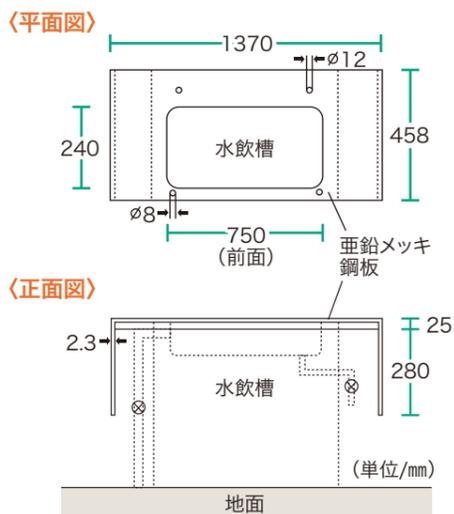
改修にともなう飲水量の変化は測定できなかつたが、飲水施設改修後から増体が良くなり、施設改修後から導入した牛は、出荷重量を大きく落とさず、出荷月齢は3カ月短縮して27カ月齢での出荷を実現できるようになった(図3、図4)。

同農場では、2015年2月には牛舎全体の3分の2の水槽を、9月に残りの水槽を全て改善している。現在は改善後に導入した牛が順次出荷されているが、今回紹介したように目に見える形で効果が現れてきているため、今後更なる生体重の増加が期待されている。

肥育期は、配合飼料をたくさん食べて大きくなっていくかどうかが重要となる。このような牛目線での小さな工夫の積み重ねが大切だと改めて感じることができた事例だ。

肥育月齢3カ月短縮達成

図2 新設水槽の設計図



ウォーターカップを利用した水やり例



水槽を利用した水やり例

図4 改修前後における月齢と体重の分布

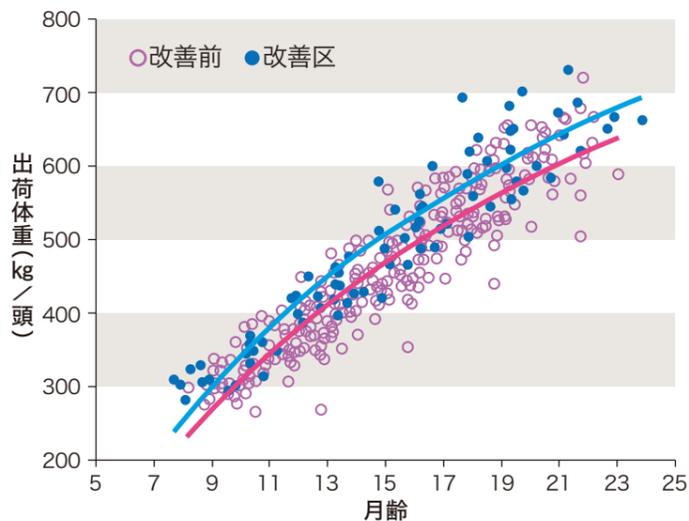


図3 飲水施設改修前後の肥育結果

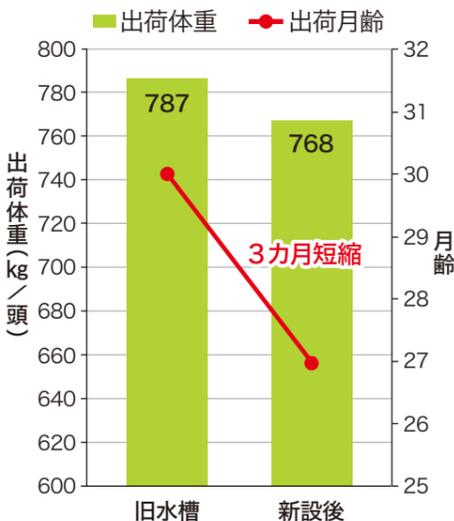


写真1

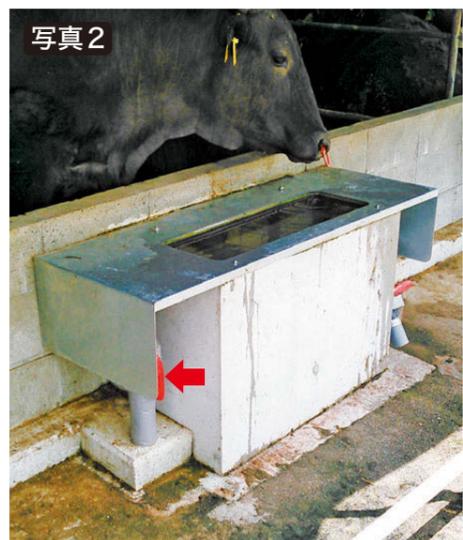


写真2

写真1.牛が飲みづらい場所に設置されていた水槽(改修前)
写真2.矢印のフタ部分で遊ばないようにカバーを設置(改修完了)

増体成績の生体重についても、30カ月齢ではカップ区785kg、水槽区866kgとなり水槽区が有意に高い結果であった(図1)。

今回の農場では、改修前は飲水場所が柱の裏に設置された状態であったため、牛が飲みづらい環境だったが(写真1)、牛にとって飲みやすい場所に新しく水槽を設置した(図2)。設置当初は、牛がコックで遊んでしまうトラブルが発生したが、カバーをつける工夫を加え、牛にとっても人にとっても優しい現在の飲水場所を実現した(写真2)。

牛が飲水しやすい環境へ改修

過去に紹介した事例において、ウォーターカップと水槽との比較を行った際、総飲水量はカップ区1万4210L、水槽区1万6721Lと水槽区が2511L多く、また配合飼料摂取量についてもカップ区4913kg、水槽区5024kgと水槽区が多かった(表)。

養牛への水やりの管理は重要項目であるが、本誌でも牛の飲水についてのみフォーカスした記事はこれまで少なかった。そこで、以前に取り上げた飲水方法を元に、実際に農場で実践された事例について紹介する。

〈農場データ〉所在地：中国地方 飼養頭数：250頭 従業員数：3名



牛の飲水環境を改善し 肥育期の増体安定化を目指す

図1 各区の発育成績の推移

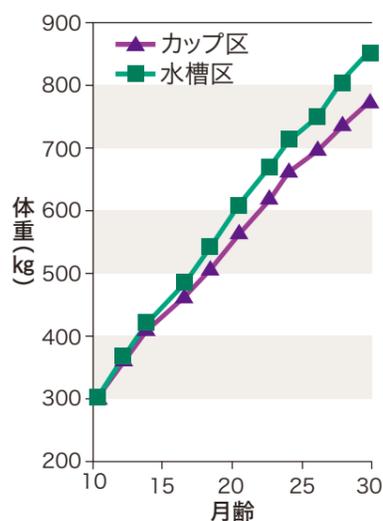


表 飼料摂取量・飲水量・飼料要求率

摂取量		
	カップ区	水槽区
配合飼料合計(kg)	4,913	5,024
粗飼料合計(kg)	1,094	1,090
飲水量(L)	14,210	16,721
飼料要求率		
	カップ区	水槽区
乾物	12.41	10.85
粗蛋白質	1.23	1.08
TDN	8.39	7.35

※牛房ごとの総摂取量を飼養頭数で割り1頭あたりの摂取量で示した

※関連記事は、ちくさんクラブ21(83号)12ページTOPICS肉牛「黒毛和種去勢牛の肥育成績を左右する飲水方法」を掲載しています。(2012年12月発行分)